

坂口安吾

戯作者文学論



戲作者文學論

この日記を発表するについては、迷った。書く意味はあったが、発表する意味があるかどうか、疑った。

この日記を書いた理由は日記の中に語ってあるから重複をさけるが、私が「女体」を書きながら、私の小説がどういうふうにつくられて行くかを意識的にしるした日録なのである。私は今まで日記をつけたことがなく、この二十日間ほどの日記の後は再び日記をつけていない。私のようにその日その日でたとこまかせ、気まぐれに、

全く無計画に生きている人間は、特別の理由がなければ、とても日記をつける気持ちにならない。

私はこの日記をつけながら、たしかに平野君を意識していたこともある。平野君は必ず「女体」について何かを書き、作者の意図が何者であるかというようなことを論ずるだろうと考えた。それに対して私がこの日記を發表し、平野君の推察と私自身の意図するところと、まるで違っているというようなことは、しかし、どうでもいいことだ。批評も作品なのだから、独自性の中に意味があるので、事実、私が私自身を知っているかどうか、そ

れすらが大いに疑問なのである。

だから、私は、この日記が私の「作品」でない意味から、発表するのを疑ったのだが、しかし、考えてみると、特に意識せられた日録なので「作品」でないとも限らない。

そして私がこの日録を発表するのは、批評家の^{そんたく}忖度する作家の意図に対して、作家の側から挑戦するというような意味ではないので、挑戦は別の場所で、別の方法でやります。

平野君からの注文は「戯作者文学論」というので、私

は常にみずから戯作者をもって任じているので、私にとつて小説がなぜ戯作であるのか、平野君はそれを知りたかつたのではないかと思う。

私のみずから戯作者と称する戯作者は私自身のみと言葉であつて、いわゆる戯作者とはいくらか意味が違ふかもしれない。しかし、そう、たいして違わない。私はただの戯作者でもかまわない。私はただの戯作者、物語作者にすぎないのだ。ただ、その戯作に私の生存が賭けられているだけのことで、そういう賭けの上で、私は戯作しているだけなのだ。

生存を賭ける、ということも、別段、たいしたことではない。ただ、生きているだけだ。それだけのことだ。私はそれ以上の説明を好まない。

それで私は、私の小説がどんなふうにしてでき上がるか、事実をお目にかける方が簡単だと思った。ところが、私は、とても厭だったのは、この「女体」四十二枚に二十日もかかって、厭に馬鹿馬鹿しく苦吟しているということだった。それはこの「女体」が長篇小説の書きだしなので、この長篇小説は「恋を探して」という題にしようと思っており、まだ書きあげてはいないのだが長篇の

書きだしというものには、一応、全部の見透しや計算の
ようなものが多少は必要なのである。伏線のようなもの
が必要なのである。

そんなものの全然必要でないもの、ただ、書くことに
よって発展して行く場合が多く、私は元来そういう主義
で、そういう作品が主なのだけれども、この「女体」だ
けはちよつと違って、私は作品の構成にちよつとばかり
捉とらわれたり頭を悩ましたりした。私はどうもこの日録が、
妙に物物しく、苦吟、襖悩しているようなのが、厭なの
で、私は元来、そんな人間ではない。私はこの小説以外

は一日に三十枚、時には四十枚も書くのが普通の例で、もつとも考えている時間の方が、書くよりも長い。もつとも、書き出すと、考えていたこととまるで違ったものに自然になってしまふのが普通なのである。

それで、どうも発表するのが厭な気がしたのだけれども、それに私は、この日記に、必ずしもほんとうのことを語っているとは考えていない。日記などはずいぶん不自由なもので、自分の発見でなしに、自分の解説なのだから、解説というものは、絶対のものではないのだから。

小説家はその作品以外に自己を語りうるものではない。

い。だから私は、この日記が、必ずしも作品でないということを、だからまた、作品でもあるかもしれぬということ、二言お断わりいたしておきます。

七月八日（雨）

佐々木基一君より来信、「白痴」についての感想を語ってくれたもの。私が日記をつけてみようと思ったのは、この佐々木君の手紙のせいだ。佐々木君は「白痴」で作者の意図したことを想像しているのだが、実のところは、作者たる私に「白痴」の意図が何であったかわかってい

ない。書いてしまうと、作品の意図など忘れてしまう。

私はこれから、ある長篇の書きだしを書こうとしてい
る。私がこの小説を考えたのは、この春のことだ。私は
この春、漱石の長篇をひととおり読んだ。ちようど、同
居している人が漱石全集を持っていたからである。私は
漱石の作品が全然肉体を生活していないので驚いた。す
べてが男女の人間関係でありながら、肉体というものが
全くない。痒かゆいところへ手がとどくとは漱石の知と理の
ことで、人間関係のあらゆる外部の枝葉末節に実にまん

べんなく思惟が行きとどいているのだが、肉体というもののだけがないのである。そして、人間を人間関係自体において解決しようと思わずに、自殺をしたり、宗教の門をたたいたりする。そして宗教の門をたたいても別に悟りらしいものもなかったというので、人間関係自体をそれどうやむやにしている、漱石は、自殺だの、宗教の門をたたくことが、苦悩の誠実なる姿だと思いきこんでいるのだ。

私はこういういう軽薄な知性のイミテーションが深きもの誠実なるものと信ぜられ、第一級の文学と目されて怪し

まれぬことに、非常なる憤りをもった。しかし、怒ってみても始まらぬ。私自身が書くよりほかに仕方がない。漱石が軽薄な知性のイミテーションにすぎないことを、私自身の作品全体によって証し得ることができなければ、私は駄目な人間なのだ。それで私はある一組の夫婦の心のつながりを、心と肉体とその当然あるべき姿において歩ませるような小説を書いてみたいと考えた。たまに、文芸春秋九月号の小説に、この書きだしを載せてみようと考えていたのである。

私はそれで、この小説を書く私か、日ごと日ごとに何

事を意図し、どんなふうにかえたり書いたりするか、日録をつけてみようと思ったのだ。書き終わると、私はいつも意図などは忘れてしまう。つまりハッキリした作品全体の意図などは私は持っていないのだ。

午後、尾崎士郎氏より速達、東京新聞の時評の感想。雨のはれまにタバコを買いに駅前へ。歴史の本、読む。

七月九日（曇）

新生社の福島氏来訪。小説三十枚、ひきうける。文芸時評は、ことわる。若園清太郎君来訪、ウイスキー持参

す、仕事ができなくなっていました。タバコを買いに外出。

七月十日（晴）

うちの寒暖計、三十一度。ホープから随想十枚。すでに書いたのがあるから承諾。

三枚書いた。思うように筆がのびないからやめる。私は今、頭に描いていることは、谷村夫妻が現在夫婦である以外に精神につながりが感じられなくなっていること、二人はそれに気づいている。世間的に言えば二人は

円満以上にいたわり合っている夫婦だ。そこから、この小説を始めることがわかつているだけだ。岡本という人物は、谷村夫妻の心象世界を説くための便宜なので、今はそれ以上のことを考えていない。

今日はだめだ。あした、また、やり直しだ。私は筋も結末もわからず、喧嘩するのだが、いつまでも仲がいいのか、浮気をするのか、恋をするのか、全然先のことは考えていない。作中人物がほんとうに紙の上に生まれて、自然に生活して行くはずなのだが、今日はまだ、ほんとうに生きた人間が生まれてはくれないから、やめたのだ。

駅の方に火事があつて威勢よく燃えているので見物に行つた。火事の見物も退屈であつた。火事の隣にアメリカの兵隊がローラーで地ならししている。隣の火事に目もくれず、進んだり、戻ったり、地ならししている。二、三十分眺めていたが、火事の方をふりむきもしないのである。この方が珍しかった。アメリカだつて弥次馬のいないはずはないだろう。もつとも日本人でも、火事などちよつと振り向くだけで、電車に乗りこみ帰宅を急ぐ人も多い、私が性来の弥次馬なのである。歴史の本、読む。

七月十一日（晴）

猛暑、うちの寒暖計は三十四度。湿気が多くて、たえがたい。

四枚書いて、また、やめる。午後、また、始めから、やり直し。六枚、書いたが、また、やめる。また、やり直しだ。谷村と、素子が、いくらか、ハッキリしてきた。

始め、私は谷村をあたりまえの精神肉体ともに平々凡々たる人物にするつもりだったのに、どうもだめだ。今日は、すこし、病身の男になった。そして私は伊沢君と葛

卷君のアイノコみたいな一人の男を考えてしまっているのだ。素子の方は始めからハッキリしている。岡本も、ハッキリしている。

若園清太郎君、夕方、内山書店N君を伴い来たる。ウイスキー持参。N君は戦闘機隊員、終戦で満州から飛行機で逃げてきた由。猛暑たえがたし。畳の上へ、ねむる。

七月十二日（晴）

安田屋のオカミサツ、母の仏前へ花をもつてきてくれる。三時に俄にわかあめ雨が降り、いくらか、涼しくなった。

五枚書いて、また、やめる。谷村が、どうも、駄目なのだ。谷村の顔もからだも心も、ほんとうの肉づきというものが足りない。私の頭の中に、まだ、ほんとうに育っていないのだろう。歴史の本、読む。道鏡の年表をつくりかけたが、めんどうくさくなって、やめる。

七月十三日（晴）

ようやく筆が滑りだしたが、谷村はハッキリ病弱の男になってしまった。健康な男では、どうしても、だめだ。私は平々凡々たる男の精神の弱さを書きたいのだが、肉

体の弱さと結びついてくれないと、表現できない。私の筆力の不足のため。私の観念に血肉の不足があり、健康な谷村に弱い心を宿らせる手腕がないのだろう。私は谷村を病弱にするのが私の手腕の不足のようで、変にこたわっていたのだが、ハッキリ兜かぶとをぬいだら、気が楽になったのだ。十三枚書いた。

どうも、これと言って、とりたてて書いておかねばならぬような意図は何もないようだ。今日書いた十三枚について、これはこれだけという気持ちであるが、谷村が岡本をやりこめる、その谷村に素子が反撥する、私は

そこから出発しようとしただけで、素子の反撥の真意が奈辺にあるか、私は漠然予想をもっていたが、書きだすと、書くことによつて、新たに考えられ、つくられて行くだけで、まったく何の目算もない。素子の肉体のもろさが私はひどく気がかりだ。まさかに岡本に乗ぜられしてあそばれることはないだろうと思うだけだ。こんなふうに考えているのは、よくないことかもしれぬ。私はなるべく岡本を手がかりのための手段だけで、主要なものにしたくない。この男にのさばられては、やりきれないような気がするのだが、私はしかし、そういう気持ち

あつてはいけないと思っており、もつとも、書いている最中はそういう気持ちは浮かばない。

七月十四日（晴）

猛暑。尾崎一雄君より速達、東京新聞の時評を送ってくれ、という。速達で返事を送る。今日は一日六回水風呂につかった。関節の力がぬけたような感じがしている。

親類の人の紹介状をもって、浅草向きの軽喜劇の脚本を書きたいから世話をしてくれ、という人がきた。北支から引き揚げてきた人だ。全然素人で、浅草の芝居を見

て、こんなものなら自分も作れると思ったというのが、自分で書きたいという脚本の筋をきくと、愚劣千万なもので話にならない。こういう素人は、自分で見てつまらないと思うことと、自分で書くことは別物だということを知らない。つまらないと思ったって、それ以上のものが書ける証拠ではないのだが、怖れを知らない。自分を知らない。

夏目漱石を大いにケナして小説を書いている私は、わが身のことにあんたんに思い至って、まことに、暗澹あんたんとした。まったく、人を笑うわけに行かないよ。それでも、この人よ

りマシなのは、私は人の作品を学び、争い、格闘することを多少知っていたが、この人は、そういうことも知らない。何を讀んだか、誰の作品に感心したか、ときくと、まだ感心したものは無いという。モリエールや、ボオマルシエや、マルセル・アシャアルを讀んだかときくと讀んだことが無いという。名前すら知らない。むちやなんだ。いつまでたっても歸らず、自分の脚本を朗讀と同じように精密に語る。私は全く疲れてしまった。私はまったく、泣きたいような気持ちになってしまった。それはわが身の愚かさ、なんだか常に身のほどをかえりみぬよ

うな私の鼻息が、せつなくなつたせいでもあつた。

私は素子の性格を解剖するところへきた。しかし、解剖すべからず、具体的な事実によつて、しかもその事実が解説のためのものではなく、事件（事実）の展開自体である形においてなすべしという考えになる。素子が岡本にすてられた女をいかに取り扱い、何を感じ、何を考えたか、これは重大でありすぎる。私はずいぶん考えた。あれこれと考えた、しかし、私が考えているばかりで、素子が感じたり、考えたりしているような気持ちにならない。私はこここのところで、つかえてしまつて、今日は

一枚半書いただけだ。ここをつきぬけると、ひろびろした海へ出て行かれるような気がするだけで、何も先の目安がない。作品の意図らしい信念とか何かそういう立派らしいものが何も無い。涼しくなってくれ。暑い暑い暑い。

この素子に私は、はっきり言ってしまうおう、矢田津世子を考えていたのだ。この人と私は恋いこがれ、愛し合っていたが、とうとう、結婚もせず、肉体の関係もなく、恋いこがれながら、逃げあったり、離れることを急いだり、まあ、いいや。だから、私は矢田津世子の肉体など

は知らない。だから、私は、私の知らない矢田津世子を創作しようと考えているのだ。私の知らない矢田津世子、それは私の知らない私自身と同様にたいせつなのだと思うだけ。私自身の発見と全く同じことだ。私はしかし、ひどく不安になっている。どうも荷が重すぎた。私は素子が恋をするような気がするのだが、それを書けるかどうか、私は谷村の方を主人公にして、それで済ませたい。私は素子がバカな男と恋をするような気がして、どうにも、いやだ。こんなことが気にかかるというのは、いけないことだと考えている。

七月十五日（晴）

連日寒暖計は三十八度をさしている。例のごとく、水風呂にもぐってはでてきて机に向かうが、頭がはつきりしない。新日本社の入江元彦という詩人と自称する二十四、五の青年がきてサロンという雑誌に三十枚の小説を書けという。書くのは厭だと言うのだが、これがまた、珍無類の人物で、育ちが良いのかもしれん、大井広介に似て、より純粹で、珍妙で、底ぬけで、目下稲垣足穂たるほにころがりこまれて、同じ屋根の下にいるそうだが、彼は

何一つ持たんです、と言う。大いにガツカリした顔である。フンドシのほかは何も持たんです。という。彼は戸籍も持たんです、という。稲垣足穂に寝台をとられ、お前は下へねろ、というので、石の上へねたそうだ。しきりに身体をかいているが、虱しらみでもいるのだらう。稲垣足穂に寝台をとりあげられるようでは、虱も仕方がなからうと、おかしくて仕方がない。二人であれこれしゃべることしやべること詩を論じ文学を論じ二時間ほどしゃべりつづけ、あんまりおかしな奴なので私は全くおもしろくなくなって原稿を承諾した。いずれ新日本社へ遊びに行

き、いっしよに菊岡久利くくりの銀座の店をひやかす約束をする。そのとき岡本潤に会えるようにしておいてくれと頼む。岡本潤からは三年ほど前一度会いたいという手紙を貰ったので、そのうち飲みに誘いに行くからと返事をしたまま、いまだに約束を果たさない。当時はちようど飲む店がなくなったからなのである。半田義之が共産党になつて、この青年の顔を見るたびに、お前も共産党になれ、と言つて、吃どもつて、唾を飛ばしながら勧誘大いにつとめる由だが、共産党は驚かんですが、唾が顔にかかつて汚なくて困るです、と言ふ。まったく、大笑いした。

昨日、私は、素子は矢田津世子だと言った。これは言い過ぎのようだ。やっぱり素子は素子なのだ。手を休めるとき、あの人を思いだす、とても苦しい。素子はあんまり女体のもろさ弱さみにくさを知りすぎているので、客間で語る言葉にならないのではないかと書いた。あの人死んだ通知の印刷したハガキをもらったとき、まだ、お母さんが生きていられるのがわかったけれども、津世子は「幸うすく」死んだ、という一句が、私はまったく、やるせなくて、参った。お母さんは死んだ娘が幸うすく、と考えるとき、いつも私を考えているに相違な

い。私はもちろん、葬式にも、おくやみにも、墓参にも、行かなかつた。今から十年前、私が三十一のとき、ともかく私たちは、たった一度、接吻ということをした。あなたは死んだ人と同様であつた。私も、あなたを抱きしめる力など全くなかつた。ただ、遠くから、死んだような頬を当てあつたようなものだ。毎日毎日、会わない時間、別れたあとが、悶えて死にそんな苦しきだつたのに、私はあなたと接吻したのは、あなたと恋をしてから五年目だつたのだ。その晩、私はあなたに絶縁の手紙を書いた。私はあなたの肉体を考えるのが怖ろしい、あなたに

肉体がなければよいと思われて仕方がない、私の肉体も忘れてほしい。そして、もう、私はあなたに二度と会いたくない。誰とでも結婚してください。私はあなたに疲れた。私は私の中で別のあなたを育てるから。返事もくださるな、さよなら、そのさよならは、ほんとにアゲユーという意味だった。そして私はそれからあなたに会ったことがない。それから数年、私は思惟の中で、あなたの肉体はほかのどの女の肉体よりも、きたなく汚され、私はあなたの肉体を世界一冒瀆し、憎み、私の「吹雪物語」はまるでああなたの肉体を汚し苦しめ歪めさいなむ崎

形児の小説、まったく実になさけない汚い魂の畸形児の小説だった。あなたは、もしあれを読んだら、どんなに、怒り、憎んだことか、私は愚かですよ、何もわからない、何をしているのだから、今も昔も、まるで、もう、しかし、それは、仕方がない。私はあなたが死んだとき、私はやるせなかつたが、爽さわやかだった。あなたの肉体が地上にないのだと考えて、青空のような、澄んだ思いも、ありません。

私は今もまた、あなたの肉体を、苦しめ、汚し、痛めているのだ。私はあなたの肉体を汚そうと意図している

のではなく、いつも、あなたの肉体や肉欲を、何物よりも清らかなものに書くことができますように、ほんとうにそう神様に祈っていますが、書きはじめると、どうしても、汚くしてしまう。私は昔から悪人を書きたくないのです。善いもの、美しいもの、善良な魂を書きたいのだが、書きだすと、とんでもなく汚い悪い人間、醜悪な魂に、自然にそうなってしまう。自然にどうしても、そっちの方へどんどん行ってしまいます。

私は筆を休めるたび、あなたを思いだすと、とても苦しい。素子の肉体は、どうしても、汚ない肉欲の肉体に

なってしまう。素子は女体の汚さ、もろさ、弱さ、みにくさを知りすぎているので、客間で語る言葉にならないのではないか、と書いて、筆を投げだしたとき、私はあなたの顔をせつなく思いつづけていた。あなたは時々、横を向いて、黙ってしまうことがあった。あるとき、あなたは何を考えていたのですか。

素子は矢田津世子ではないけない。素子は素子でなければいけない。素子は素子だ。どうしても、私は、それを、信じなければならぬ。私は四枚書いた。筆を投げだしてしまう時間の方が多いのだ。

七月十六日（晴）

酷熱。うちの水銀は三十五度だ。中央公論の海老原氏から速達。火の会の雑誌に小説かエッセーを書いて、という。これはどうしても承諾してやりたい。ずいぶん無理だと思ったけれども、必ず、書こうと決意する。海老原氏は昔から私の仕事を愛してくれた人なので、私はそういう人のために、仕事をすることを喜びとしているのである。売れそうもない雑誌だと、なおさら、書いてやりたい。

谷村夫妻はたぶんおのおのの恋をすることになるだろう、と私は考えていた。谷村の方は、もう、肉体のない、魂だけの、燃えただれ死んでしまっていていいような、恋をしたいのだ、と告白している。そこで、その恋の相手に、とりあえず、私は信子という名前を出しておいた。けれども、とりあえず、そういう名前だけ出しておいたが、どんな女だか、全然まだ考えていない。谷村自身が、信子がどんな女なのだか、やがてその性格を自然に選ぶだろう。まだ私には、それを考えるひまもなく、必要もないのだから。その恋愛が、この小説のテーマになるのだ

ろうか？ そんなことは全然意図していなかったのだ。

どうも、素子の方は、だんだん恋ができそうもなくな
って行く。だんだん堅くなり、せまく、ヤドカリみたい
に殻の中へひっこんで行くので、どうにも意外だ。私は
谷村の恋よりも、素子の方が、何かケタのはずれた恋を
やりだしそうな予感、あるいは予期がないではなかった
が、どうも、私は、このへんで、二、三日、書くのをや
めて、ボンヤリ、時間を浪費してみる方がいいのではな
いかと思う。私は二十八枚目まで書いた。思考の振幅が
窮屈になりかけたときは、時間でも金でも、ただ、浪費

するのがいいという、これは私が習慣から得た信条で、それに限るようだ。

午後二時ごろ暑いさかり、雑談会の立野智子氏来訪。これには、ちよつと、こまった。この人は、この日記をつけはじめた前日、すなわち七月六日に、速達をよこして、インチキ文学ボクメツ論をやれ、という。先方が女なのだから、インチキ文学というのと、ボクメツというのが、なんとも、時世的に勇ましく、私は笑いがとまらなかつた。女の方が勇壮カツパツ、^{すご}凄すぎるよ。私はジャーナリズムの厭らしさにウンザリして、拒絶の代わり

に、勇敢無敵婦人ジャーナリストをひやかす一に文を草して、そくざに送ったのだ。

おとなしそうな娘さんなのだ。けれども、時々チクチク皮肉めき、なにか、素直ということが悪さを意味するとも思っている様子で、どうも苦しい。痛々しい。インチキ文学ボクメツどころか、坂口安吾などというのが、ほんとうはインチキそのものなので、私が偉そうに先輩諸先生をヤツツケほうだいにヤツツケているのなど、自分自身のインチキ性に対する自戒の意味、その悪戦苦闘だということをお存知らない。誰しも御自身のインチキ性

を重々知ることがどんなにたいせつか、この人に語りたかったが、素直に受けてくれず、皮肉られそうだったから、言わなかった。ほんとうは素直な人なのだが、ひねくれることを美德と思っているような、身構えというところが立派だと思っっているようだ。善良な弱い気質をゆがめて、わざわざ武装しているような気がする。この暑いのに、何かムリヤリ精いっぱい、ムリヤリ思いつめているようで、痛々しい思いがした。ひどく同情してしまつて、すぐ原稿引き受けた。

夜、九時ごろ、涼しくなつてから、さつそく雑談の原

稿を書いた。中戸川とみゑさんのこと。一度書きたいとこの数年考えていたのだが、こんなふうにかんたんにくつもりはなかったので、いずれ「春日」を読んで、ゆつくりと考えていたのだが、手もとに「春日」がなく、むしろない方が都合がいいさ、「春日」など改めて読んで変に物々しく本格的にやるとかえって書けそうもない。めんどうな気がして、三時間ぐらいで、あっさり書いてしまった。

七月十七日（晴）

酷熱、また、酷熱。小学館から速達、小説五十枚、とても書けない、ことわる。

道鏡の年表をつくろうとしたら、エミの押勝になり、
 諸兄もろえになり、不比等ふひとになり、鎌足かまたりになり、だんだん昔へ
 さかのぼりすぎて、どうも、私は、何をやっても、過ぎ
 たるは及ばず、という自然の結果になってしまふ。久米
 邦武の奈良朝史をノートをとりながら、読む。深夜にな
 お酷熱。水風呂にはいり、ようやくよく睡ることができた。

七月十八日（曇、午後二時ごろより晴）

曇っているうちは^{しの}凌ぎよかった。日がてりだすと、この二階はムシ風呂だ。私は早朝から、この長篇は、今年じゆうに必ず書けるといふ妙な自信がわいているのだ。まったく妙な自信だ。全然、筋もプランも目当てのつかない空々漠々、何を目安に自信があるのだい。けれども全く自信満々、ふざけた話だ。一昨日、雑談の原稿書き、それから、この小説を忘れたような顔しているのが、よかったですよ。妙に、晴れ晴れとした気持ちになりつつ

ある。力があふれてくるのがわかるような気持ちだ。こういう時は何という愉しさだろう。だが、一年に何日、こんな日があるかと思うと、なさけない。

私はわざと筆をとらない。ふくらみつつある力をはかって、ねころんで本を読んでいる、なんとも壮大で、自分がたのもしい。架空の影の虚しい自信と力なのだが、それを承知で、だまされ、たわいもない話だが、それでほんとに、いい気なのだから笑わせる。

七月十九日（晴）

私は病気になった。下痢と腹痛、たぶん水風呂のたた
りだろう。夏の悪熱は、私からあらゆる力をはぎ、もの
うさと、とがった感情だけを残す。私はうつうつしつ
原子バクダンのバクハツばかり考えている。私自身がパ
クハツされたいのか、人をバクハツしたいのか、わから
ない。ただ、すべてがとがり、痛み、平和なことが考え
られないのだ。熱のため、外気の暑さがわからない。

七月二十日（晴）

猛烈に暑い。夜になっても、暑い。どうやら熱が下がったので、暑さがわかってきた。もう原子バクダンは考えないが、仕事のこととも考えられない。本も読む気にならない。

七月二十一日（晴）

猛烈に暑い。中央公論、小滝氏来訪。今度だす短篇集の話。もし長篇に没頭するなら、生活のこととも考えるか

ら、と言ってくれる。これは非常に嬉しく、心強く承つたが、私は今、二つの場合を考えている。私は今、書きたいことがいくらでもあるような気がしているので、いったい何をどう書くのか、書けるだけ書き、限度のくるまで、書いてみるか。さもなければ、短篇など書きたいような気持ちでも書かず、長篇だけ、一つずつ、没頭してみようか。この二つ。私はともかく、一応前者をとることにしようと思った。はっきり、心をきめた。

原稿に向かう。岡本の金談のこと。岡本の媚態びたいのこと。どうして、こんなふうになるのだらう。とても苦しい。

岡本の媚態も汚らしく不潔で、なんとも厭だけれども、こんなに汚され、いためつけられ、もてあそばれている素子の肉体が、肉体のもろさが、あんまりだ。どうしてこんなになるのだろうか。まるで、なんだか、ただ、もう、いちずに、憎しみをこめて、復讐しているような意地の悪さではないか。どうして、こうなるのだ。そんな意図は微塵みじんもないのに、どうしても、こうなる。筆を投げずにいられなくなる。一句書いては、ひっくりかえって目をつぶり、三十分もたって、また、一句書くというぐあい。どうにも、書きたくない気持ちがある。たった

一枚半。

七月二十二日（晴）

猛暑。暁鐘の沖塩徹也君来訪。会ったのは始めてだが、私の親しい友人たちの同人雑誌にいた人で、名前はよく知っている人。中国で八年も兵隊生活をさせられたという運の悪い人で、その生活を二時間ばかり語って帰る。九月いっぱいだったら短篇書く約束する。

私はどうも、書くのが苦しい。私は岡本の卑しさが厭なのだが、谷村は、その岡本をともかく芸術家のおもしろ

ろさがあるじゃないかという。谷村の考えは、なんだか、危なっかしい。私は今日、藤子のことを書いたとき、谷村は魂の恋などと妙なことを言っているのだけれど、結局、藤子と、その魂の恋とやらをやり、馬脚を現わすのではないか、そういう不安がしつづけている。それだったら、ずいぶん、なさけないことだ。悲しいことだ。みすぼらしいことだ。私は素子が誰かと恋をして、谷村の変にとりすました気どった悟った一人よがりみたいなのを、メチャクチャに破裂させ、逆上混乱させてくれればよいと思うのだが、素子はだんだん恋ができそうもな

くなるばかりだ。もっとも、素子が恋をして、谷村の足場がくずれて、そんなむずかしい関係をまともに発展させる手腕にめぐまれているかどうか、それが、また、不安なのだ。今から、こんなに苦しくて、この先、どうなのだろうと、私は私の才能について、まったく切ないのだ。

七月二十三日（晴）

猛暑。読書新聞の島瑠璃子氏来訪。荷風かふうの問はず語り
の書評。私は書けないから、佐々木基一君をわずらわす

よう、すすめる。佐々木君は荷風については私と似たような見解を持っていることを先日の手紙で知ったからだ。

新潟の兄、上京。かすかに、雨あり。いささかも涼しくならず、かえって、むしあつい。

素子は岡本の媚態を「みじめ」だという。そして、その媚態が話しかけているのは自分の肉体に対してであることを「今」は気がつかない、と谷村は考える。そして、今は気がつかないということに、なお多くの秘密があるように思った、というのだが、素子が果たして気がつい

ていないか、谷村はそう思ったにしても、果たしてそうか、どうか。私はどうも、ここで、素子の肉体に同情しすぎたようだ。私は堪えられなかったのだが、素子は気づかぬはずはない。谷村が、今は気がついていないと解釈するのは変だ。谷村は気づいていると解釈するのがほんとうじゃないかと何度も思ったのだが、私はどうも、私が素子の肉体について、そうあってほしいと思うセンチメンタルな希望を、谷村におしつけたような気がする。私はそう考えて、いやだったが、しかしそうとも断言ができない。ほんとに素子は今は気がつかないかもしれな

いのだと、なんとなく言い張りたい気持ちがあるので、
まア、いいや、こうやっておけ、あとは野となれ山とな
れ、こんな小説、どうでもいいや、と筆を投げだしてし
まったのだ。

七月二十四日（晴）

同居の大野一家族、一夏の予定で故郷へ。次女の婚礼
の仕度だ。酷熱。無慙むざんな暑さだ。

一日ボンヤリしている。どうも書けない。考えること
もない。何やかや、ふと、小説のこと考えるようだが、

とりとめのない影だけで、実のあることは考えていない。実にどうも、空漠たるものだ。

夜になって、兄、若園清太郎とともに帰ってくる。若園君、炉辺夜話集、さがして持ってきてくれる。中央公論からだす短篇集のためのもの。若園君泊まる。私は一夜ねむり得ず、若園君またねつかれざるもののごとし。深夜に至るもまったく暑熱が衰えざるためである。

七月二十五日（晴のち曇）

頭が痛む。読書新聞より、どうしても問はず語り書評

を、という重ねての依頼で、本を送ったという。勝手に本を送ったなんてむちやな話だ。夕方から涼しくなる。長野の兄社用で上京、夜ますます涼しい。久々の涼気。今日はたった一度しか水風呂へはいらなくて済んだ。食事の用意に困却。奇怪な御飯ができあがる。今日は仕事はしなかった。

七月二十六日（晴）

さして暑くない。文芸春秋の大倉氏来訪、原稿はまだできないが、あと四、五枚だから、おそくとも二十九日

には私の方からおとどけすると答える。しごくマジメな青年。こんなふうなジャーナリストは今までは日本になかったタイプのようだが、近ごろの若い人には往々こういうマジメきわまる人を見かける。自我を中心に、いかに生きべきか、ということを考えている。特攻隊の死に對しての覚悟の高さを疑ぐると言っていた。自分自身の戦争生活の死との格闘からの結論なのである。考え自体でなく、考える態度のマジメさが、私にははなはだしく快かった。芥川ヒロシ氏の友人の由で、明日、芥川家を訪ねると言うから、その節は葛巻義敏にくれぐれもよろ

しく、とたのむ。

若園君、真珠をもつてきてくれる。この本は私の発禁になった本。私は自分の本を一冊も持たない。黒谷村がまだ手にはいらぬ。あの中から「風博士」一つだけ、今度の短篇集へ入れたい。その入手を若園君にたのむ。安田屋のタカシ青年遊びにくる。近所の罹災者りさいで、戦争中は私の家に住み、この家を火からまもってくれた。私の家の前後左右の隣へおのおの五十キロの焼夷弾が落ちたのをバクハツ直後の猛火の中へ水をかぶってとびこんで前後左右に火を叩きつけ、まったく物凄い。左官屋の

お弟子だが、職人の良心と研究心が旺盛で、実に好ましい青年だ。もつとも、おかげで、どうも、今日は仕事が出来なかったのだが、できなくなつた。十時ごろ、もう、ねる。よく、ねむつた。涼しいからだ。

七月二十七日（晴）

どうも、今日は、思いがけないことになつた。仁科という青年が登場してしまつたのだ。私は始めから素子のために二人の青年が必要だと考えていた。素子がだんだん恋をしそうもなくなつたので、どうもいけない、岡本

のほかにも、若い青年を一人、と考えており、どうも私は、素子の肉体が岡本などにもてあそばされるのが堪えられず、なおさら、青年を、と考えていたのだが、私が昨日まで考えていたのは、もっとマジメな相当俐巧りこうな青年のつもりであったのに、まったく、あべこべになってしまった。

原稿紙に向かうと、まるで気持ちが変わってしまったので、私が私の好みや感傷から割りだして予定していたことなど、とるにも足らぬことになり、書いてみると、すぐ、つまらなさがわかり鼻につく。

どうして、青年が仁科でなければならなかつたか、どうにも、私は不愉快だ。しかし、この青年でなければならなくなつたので、仕方がない。どうしても、素子の肉体がもてあそばされる宿命から、私は逃げられないのだらうか。私はこの青年と素子に恋などさせたくない。もし恋をするなら、別のも一人の相当ましな人物を登場させたい。その私の感傷が、果たして許され遂げられるであらうか。そういう私の希望のせいか、素子は、やっぱり、恋のために、動きそうもない。仁科を相手にうごきそうもない。そういう私の希望的態度がいけないと思われた

ので、私は今日じゆうに書き終わる充分な時間があったが、中止して、歴史の本を読むことにした。今日もさして暑くない。春陽堂の高木青年来訪、小説ひきうける。

七月二十八日（晴）

ひどく合理的で、始めから、何かハッキリ割り当てられた筋書のように首尾一貫したものができた。谷村は仁科によって蛙かえるの正体などというものを発見した。むしろ私は蛙の正体が見破られることを予想はしていたが、こんなふうには、いやにハッキリと、割り切ったように見

破られるとは思わなかったもので、私はもつと、漠然たる不明確な姿で、ぼんやりした姿のまま描いて素知らぬ顔でいたい気持ちでいたのだ。ボンヤリどころか、いやに明確で、まるで、小説を書きだした時から仁科を予定していたように、いやにハッキリしめくくりがついてしまったのは、どうも変だ。どうも話が巧くできすぎているので、約束が違うという気がする。約束といっても、別に心当たりはないが、強いて言えば、ボンヤリということだ。この明確さは、どこか不自然のような気がするのだが、仕方がない。

谷村は蛙の正体を見ぬいて、素子がひそかに仁科を愛しているにしても、そういう夢は仕方がないと考える。夢のない人間はあり得ず、夢すらも持ち得ぬ人を愛し得るはずもないと考える。

谷村のこういう考え方が、私はどうも不満なのだ。素子に恋をさせ、この気どりをコツパ微塵にしてやりたい。それでもまだ、こんなふうに取り返していられるなら、そのときこそ大いによかろう。そう思う。そのくせ、素子はやっぱり恋をしそうもない。いや、素子がしそうもないのじやなしに、谷村がそれを巧妙にくいとめているよ

うに思われるのだ。素子のひそかな夢を肯定して、夢は仕方がないものだと言谷村が思うのは、私の希望がそこに反映しているのです、つまり単なるひそかな、夢だけで終わらせたいという、それは谷村自身よりも作者の作意であるような気もした。

それで、私は、谷村に素子を憎ませ、その恋心を嫉妬させ、衝突させようかと、大いに考えたのだが、どうしても、そうすることが、できない。やる気にならない。その方がかえって不自然だ。このままの方が自然なので、もう、いい加減、これで終わりにした方がいいと考えら

れた。いつもだと、もう勝手にするがいいや、どうにかなれ、と筆を投げるのだが、今日はなおあれこれ迷い、迷うと言っても突きつめた思いではなく漫然たる思いなのだが、結局、これでいいことに決心するには、三時間ぐらい、漫然と迷っていた。

私はもう、素子をこれ以上登場させたくない。仁科とくだらぬ恋をして、ただ肉体の最後の泥沼へ落ちるよう
に思われたり、ともかく、どうも、素子を書くかぎり、
その肉体を汚すこと、もてあそぶこと、まるで私はその
清純に悪意をこめているとしか、復讐しているとしか思

われない。

この続篇は谷村に恋をさせるつもりなのだが、素子がそれをどう受けとめるか、私は素子に谷村の恋を知らせたくないような気持ちなのだ。素子がヤキモチをやいて肉体的に焦燥しだすのが堪えられない気持ちだから。ともかく、まあ、ここまで書いたことについては、私は多く苦痛であったが、多少は満足もしている。ともかく精いっぱいなのだろう。これで駄目なら、私自身が、まだ、駄目なので、出来、不出来のたまたま不出来の方だったという気休めは通用しない。

思索から小説依頼。とても書けない、ことわる。読書新聞から「問はず語り」がとどいたので、読んだ。軽すぎる。重い魂が軽いのじゃない。軽いものが、軽いのだ。

七月二十九日（午後より雨）

文芸春秋へ行き鷺尾洋三氏に原稿渡す。ともかく、精いっぱいのものです。とだけ言った。まったく、目下はそれが全部の感想なのだ。中央公論社へ行き、小滝氏に原稿をとどける。まだ「風博士」だけが足りない。

たったそれだけ路上を歩いただけで、会った人、東京

新聞寺田、改造西田、新聞報柴野。若園君とその友人某君と酒をのむ。久々の酒、嬉しかった。大いに駄ボラを吹く。酔っ払うと、急に、大いに「女体」に自信満々たるように亢奮こうふんしだしたから、むちやで、私は酒を飲まないうちは、ともかく精いっぱいの仕事だった、と、むしろやや悲痛にちかい感慨で、暗く考えていたのであった。酒はむちやだ。不当に気が強くなる。ずいぶん「女体」を威張って、二人のききてを悩ませたようだ。若園君、私の家へ泊まる。むりに引っぱってきたのだ。三、四日分のパンを焼いてもらおう魂胆なのだ。一人になったら、

実に落ち付いて気持ちがいいが、食事だけ困るのだ。

日本文学電子図書館

墮落論

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店

昭和45年1月30日 改版3刷



日本文学電子図書館